

○天下の稀品の真実！ 筆者所蔵の明治10年銘を眺めながらの考察！

# 旧2円金貨明治9、10、13年に関する情報整理

島村 一雄

## 1 まえがき

旧2円金貨明治9、10、13年は、日本金貨原色図鑑（文献16）の冒頭部分によれば、「いずれも発行量が少なく、戦後の業者間の取引はほとんど皆無であった・・・中略・・・旧金貨中この3種類が一番少ない。」とある。さらに、この文献16の旧2円金貨明治9年のところには「一般市場にも未見品として扱われている。現品も数枚の程度ではないかと思う。」、旧2円金貨明治10年のところには「最も貴重な存在で、日本国内に於ても二、三品を知るのみにして蒐集の対象外のものと思う。」、旧2円金貨明治13年のところには「実在は誠に少なく、日本国内に於ても一、二品を知るのみで天下の珍品として珍重すべきものである。」とある。この文献16が出版されたのは昭和

55年（1980年）であるから、この文献掲載の金貨を収集された大野政男氏や七條兼三氏がコレクションをされておられた1950年代から1970年代頃までの時代における、旧2円金貨明治9、10、13年がオークションや即売会に出てくる頻度は、そのような状況であったことが推察される。

一方、文献16以後、1990年代から今日までの旧2円金貨明治9、10、13年の市場への出現頻度というのには、「ほとんど皆無」というほどひどいものではなく、ごく稀にはあるが、市場で現品を見る機会はあると認識している。ただし、市場に出てきてくれたとしても、天文学的とまでは言わないが、大野政男氏や七條兼三氏が収集されておられた時代よりもはるかに高嶺の花レベルの価格になっており、昔も今も、入手に困難を

極める種類の金貨であることに変わりはない。

一方、近年、その稀にはあるが、市場に出てきてくれる旧2円金貨明治9、10、13年のいずれかを実際にお持ちの方で、手持ちの当該金貨について、エッセイ、考察、調査、画像紹介といったことをなさっている方を、ほとんど見ることはない。貴重な研究対象が、退蔵されたままというのには、まことに惜しまれるところである。

このような状況の中、筆者は、天下の稀品旧2円金貨明治9、10、13年のうち、明治10年銘を実際に所蔵しており、それを眺めつつ、既往研究も適宜参考にしながら、筆者なりの視点により、未解明な点も多い旧2円金貨明治9、10、13年の真実の姿に迫ってみたいと考えた次第である。

本報告では、旧2円金貨明治9、10、13年を対象として、製造枚数、現存枚数、製造枚数に対する現存枚数の残存率、製造目的、極印製作者、年号シリーズとしての稀少性（年号ブランド）について整理する。

まず、製造枚数については、基本中の基本であり、文献によりあらためて整理を行っておく。現存枚数についての調査は、文献を見るかぎり、存在すると思われる対象について網羅的に行われたものは、現状ではないと思われるので、公的機関及び博物館等、オークション関係、その他の3つの大きな区分を設け、公開文献からわかる範囲で、それぞれの区分ごとに詳細な調査を行って、結果をまとめる。それらの結果をもとに、今回、製

## 2 検討方針



(a) 明治9年



(b) 明治10年



(c) 明治13年

図1 旧2円金貨縮小タイプの概要(七條コレクション)(文献17))

造枚数に対する現存枚数の比である残存率という概念を新たに提唱し、残存率の算定結果をまとめる。さらに、文献調査により、製造目的や極印製作者についてまとめる。以上は、客観的なデータや文献に基づく情報整理である。

一方、旧2円金貨明治9、10、13年は、それぞれの年号において、旧2円金貨から旧1円金貨までの5種類の金貨の同年号シリーズ中の1枚であるという認識から、年号ブランドとでもいうべき稀少性について私見を述べる。

以上のような、調査・検討を踏まえ、総合的に見た旧2円金貨明治9、10、13年の価値について考察を行う。

### 3 検討内容

旧2円金貨明治9、10、13年の概要を年号面のみ、七條コレクションからの引用で、図1に示す。筆者所蔵のものは、これら3年号のうち、明治10年銘であるので、拡大図を図2に、スラブ入り全体図を図3に示す。

詳細は、順を追って述べるが、旧2円金貨明治10年は、明治11

(1878)年5月20日から11月10日まで開かれたパリ万国博覧会用に作られたものである。製造枚数は178枚、今回の調査で現存が確認できた枚数は7枚、しかも、造幣局には現品も極印もないとのことなので、非常に稀少なものとなっている。

図2及び図3に示すものは、NGC PF66 CAMEOの評価を得ており、状態の実状としても、これまで、筆者が見てきた旧2円金貨明治10年の中では、最も美しい逸品である。

この旧2円金貨明治10年を眺めながら、以下、旧2円金貨明治9、10、13年に関して、製造枚数、現存枚数、製造枚数に対する現存枚数の残存率、製造目的、極印製作者、年号シリーズとしての稀少性(年号ブランド)についての調査・検討を進めて行くこととしたい。

#### (1) 製造枚数

造幣局百年史資料編(文献8)によれば、旧2円金貨の発行枚数は、明治8年度(871)9630は39枚、明治6年(971)10630は0枚、明治10年(1071)11630は178枚、明治11年

(1171)12630は0枚、明治12年(1271)13630は87枚となっている。貨幣の生ひ立ち(文献9)によれば、旧2円金貨明治9年の製造時期は、明治8年12月、旧2円金貨明治10年の製造時期は、明治10年11月、旧2円金貨明治13年の製造時期は、明治13年2月とされているので、旧2円金貨明治9、10、13年の製造枚数は、それぞれ、39枚、178枚、87枚ということになる。

一方、前出の貨幣の生ひ立ち(文献9)によれば、旧2円金貨明治9年は、製造枚数が40枚で発行枚数が39枚、旧2円金貨明治10年は、製造枚数が179枚で発行枚数が178枚、旧2円金貨明治13年は、製造枚数が88枚で発行枚数が87枚となっている。この製造枚数と発行枚数の差は、製造された貨幣の中から品位量目の試験のため、供試貨幣として、それぞれ1枚が採られたためである。

なお、日本貨幣商協同組合による日本貨幣カタログでは、長らく旧2円金貨明治9年及び10年の発行枚数として誤った数字が記載されてきたが、直接的には文献25)文献27)が契機となって誤りが正し